

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

# 脇浜遺跡

— 発掘調査報告書 —

1986

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第6輯

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

# 脇浜遺跡

—発掘調査報告書—



1986

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



遺跡遠景

畠中遺跡南東上空から



72-O R断面

西から



91-O R 全景(古墳時代前期の面)

北西から



Ⅲ区北東側断面

南西から

## 序 文



本協会が、関西国際空港建設に伴う各種公共事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施する機関として設立されて2年目を迎え、調査事業を行う組織・体制も当初の予定に近付いてきたことは、大阪府教育委員会をはじめ近畿の各府県市教育委員会のご指導並びにご支援の賜ものであります。

今回、報告いたします脇浜遺跡は、貝塚市脇浜に所在しており、都市計画道路貝塚中央線建設に先立つ発掘調査でありまして、昭和60年度に現地調査を、昭和61年度に遺物整理を、大阪府岸和田土木事務所から委託を受けて実施した調査事業であります。

本遺跡の調査は、昭和50年度に（財）大阪文化財センターが遺跡範囲の確認調査を、昭和56年度に大阪府教育委員会が発掘調査をなされ、古墳時代から近世にかけての掘立柱建物跡など多くの遺構を検出されたが、調査範囲については一部残され、府道堺・阪南線（旧国道26号線）より北について未調査となつた、今回の調査は、この未調査地区を対象としたものであります。

今回の調査結果については、古墳時代の掘立柱建物跡と中世の土塙が検出されると共に近木川の河口部で形成された砂堆内から縄文時代後期の土器、古墳時代の婧壺型土器・製塩土器の他土師器・須恵器などが出土し、従来大阪湾沿岸であまり注目されていなかった海浜部の遺跡の実態について、その性格をより明らかにすることが出来た調査であります。

本調査を実施するにあたり、大阪府土木部交通政策課・岸和田土木事務所・大阪府教育委員会・貝塚市教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。

今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願い申し上げます。

昭和61年11月

財團法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野 素雄

## 例　　言

1. 本書は都市計画道路貝塚中央線建設予定地内に所在する、貝塚市脇浜遺跡昭和60年度（一部昭和61年度を含む）の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第2班技師藤田憲司、黒田慶一、田中晋作、橋豆田佳男、蜂屋晴美が担当し、昭和60年6月19日から現地調査に着手し、昭和61年3月25日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
5. 調査および報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課の他、梶山彦太郎、近藤義郎（岡山大学）、酒井龍一（奈良大学）、和田晴吾（立命館大学）、豊田兼典（大阪府科学教育センター）、近藤利由（岸和田市教育委員会）、鈴木陽一（泉佐野市教育委員会）、趙哲濟（大阪市文化財協会）、西岡敏・池田毅（貝塚市教育委員会）、山崎純男（福岡市教育委員会）、山本三郎（兵庫県教育委員会）の各氏から、御指導、御教示を得た。また、豊田兼典氏からは、地質学的な考察に関して玉稿を頂いた。記して感謝したい。
6. 本遺跡では、花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析、木製品の樹種鑑定を実施した。結果は付論として取録した。
7. 調査は国土座標第VI系を基準にした4mメッシュの地区割りを行って進めた。またこれとは別に調査区を便宜的に区分してI～IV区の呼称も用いた。4m区画の呼称、便宜的に用いた四区分、文中の記号については、第III章第1節に一括して示した。図中に用いた方位は座標北を示し、標高は文中でTPと略称した。
8. 遺構写真撮影は調査担当者全員の責任で行い、空中写真は大東航空測量株式会社に、遺物写真は高田充哲氏による。
9. 本書で用いた色調の表現は「新版標準土色帳」1976年9月版に拠った。
10. 本書の挿図、図版作成は主に黒田が担当し、全体を藤田がまとめた。文責は各項目末尾に記した。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯.....	1
第II章 地理的・歴史的環境.....	2
第III章 調査の成果.....	7
第1節 調査の方法と経過.....	7
第2節 I区およびIV区.....	9
第3節 層序.....	15
a) 概要.....	15
第4節 II区.....	27
a) 概要.....	27
b) 犬走時代.....	27
c) 古墳時代～中世.....	35
第5節 III区.....	44
a) 概要.....	44
b) 犬走・弥生時代.....	44
c) 古墳時代.....	48
d) 中世.....	91
e) 近世以後の遺構.....	95
第IV章 まとめ.....	102
付論(1) 脇浜遺跡をとりまく環境の古生態学的検討.....	107
(II) 脇浜遺跡におけるプラント・オバール分析.....	113
(III) 脇浜遺跡出土木製遺物の用材について.....	116
(IV) 脇浜遺跡の地形環境.....	119

## 挿図目次

第1図 脇浜遺跡調査前風景.....	1
--------------------	---

第2図	貝塚市周辺地質図	3
第3図	貝塚市周辺遺跡分布図	4
第4図	神前里など近木庄復元図	6
第5図	地区割模式図	7
第6図	調査区全図	8
第7図	I 区平面図	10~11
第8図	I 区土層断面図	12~13
第9図	I 区 1~OW 平面図・立面図	13
第10図	IV 区トレンチ位置図	14
第11図	IV 区土層断面図	15
第12図	層序概念図	16~17
第13図	中央畦土層断面図およびII区直交畦土層断面図	19~20
第14図	中央畦土層断面図およびIII区直交畦土層断面図	21~22
第15図	北東壁土層断面図	23~24
第16図	南東壁土層断面図	25~26
第17図	II 区全体遺構配置図	27
第18図	II 区 72~73~OR 平面図	28
第19図	II 区 72~73~OR 土層断面図	29
第20図	縄文土器拓影・実測図	31
第21図	縄文土器拓影・実測図	32
第22図	石器実測図	34
第23図	石器実測図	35
第24図	II 区古墳時代・中世ピット群平面図	36
第25図	II 区中世ピット群平面図 (61年度調査)	37
第26図	カニ穴断面	39
第27図	足跡	39
第28図	足跡平面図・立面図	39
第29図	II 区第 4 層出土遺物実測図	40
第30図	II 区第 4 層出土遺物実測図	41
第31図	II 区第 3 層出土遺物実測図	42

第32図	II区第4層出土瓦拓影・実測図	43
第33図	III区全体遺構配置図	45~46
第34図	III区出土土器・石器実測図	47
第35図	III区古墳時代遺構平面図	49~50
第36図	III区88-O R遺物出土状況図	52
第37図	III区88-O R土層断面図	53
第38図	III区88-O R出土遺物実測図	54
第39図	III区88-O R出土遺物実測図	55
第40図	III区88-O R出土遺物実測図	56
第41図	III区88-O R出土木製品実測図	58
第42図	III区97-O R出土遺物実測図	60
第43図	III区91-O R土層断面図	62
第44図	III区91-O R肩部遺物出土状況図	63
第45図	III区91-O R肩部出土遺物実測図	65
第46図	III区91-O R肩部出土遺物実測図	66
第47図	III区91-O R肩部出土遺物実測図	67
第48図	III区91-O R肩部出土遺物実測図	68
第49図	III区91-O R肩部出土織塙土器実測図	70
第50図	III区91-O R肩部出土遺物実測図	72
第51図	III区91-O R肩部出土木製品実測図	73
第52図	III区91-O R内出土遺物実測図	75
第53図	III区91-O R内出土遺物実測図	76
第54図	III区91-O R内出土遺物実測図	77
第55図	III区91-O R内出土遺物実測図	78
第56図	III区91-O R内出土遺物実測図	79
第57図	III区91-O R内出土遺物実測図	80
第58図	III区中洲付近出土遺物実測図	82
第59図	III区中洲付近出土遺物実測図	83
第60図	III区中洲付近出土木製品実測図	84
第61図	III区中洲付近出土木製品実測図	85

第62図	III区101-O B 平面図・立面図.....	87~88
第63図	III区122・126-O P 出土遺物実測図.....	89
第64図	III区127-O O 平面図・立面図.....	90
第65図	III区94-O L 平面図.....	92
第66図	III区135-O F 平面図・立面図.....	93
第67図	III区84-O Z 平面図.....	94
第68図	III区74-O W.....	95
第69図	III区90・99-O R 平面図.....	96
第70図	III区87-O Z 平面図.....	97
第71図	III区包含層出土遺物実測図.....	98
第72図	III区包含層出土遺物実測図.....	99
第73図	III区包含層出土遺物実測図.....	100
第74図	III区90・99-O R および近世遺構出土瓦拓影・実測図.....	101
第75図	II区・III区分析試料採取位置図.....	106
第76図	主要花粉・胞子のダイアグラム.....	109
第77図	イネ花粉比率.....	111
第78図	プラント・オパール分析結果.....	114
第79図	プラント・オパール分析結果.....	115
第80図	脇浜遺跡周辺地形分類図.....	119
第81図	脇浜遺跡周辺部の等高線図.....	120
第82図	脇浜遺跡地層断面図.....	121
第83図	脇浜遺跡周辺の海岸変遷図.....	122

## 表 目 次

第1表	珪藻化石群集.....	110
第2表	樹種鑑定結果一覧表.....	118

## 図版目次

- 図版1 臨浜遺跡周辺空中写真  
図版2 II区72・73-O R  
図版3 II区72-O R 遺物出土状況  
図版4 II区南東段丘・砂堆断面  
図版5 II区72-O R 上面・ピット群  
図版6 II区足跡・カニ穴  
図版7 III区88-O R 遺物出土状況  
図版8 III区88・89-O R 遺物出土状況  
図版9 III区88-O R 遺物出土状況  
図版10 III区88-O R 遺物出土状況  
図版11 III区88-O R 遺物出土状況・土層  
断面  
図版12 III区88・91-O R  
図版13 III区91-O R 肩部遺物出土状況  
図版14 III区92-O R 土層断面・遺物出土  
状況  
図版15 III区97-O R・遺物出土状況  
図版16 III区91・96-O R 土層断面  
図版17 III区101-O B 全景  
図版18 III区101-O B・121-O F  
図版19 II区・III区ピット・土塙  
図版20 III区101-O B 柱穴  
図版21 III区91-O R  
図版22 III区91-O R 土層断面・遺物出土  
状況  
図版23 III区91-O R 遺物出土状況・  
土層断面  
図版24 III区94-O L  
図版25 III区84・87-O Z  
図版26 出土遺物 織文土器  
図版27 出土遺物 石器  
図版28 出土遺物 土師器  
図版29 出土遺物 土師器  
図版30 出土遺物 土師器  
図版31 出土遺物 土師器  
図版32 出土遺物 土師器  
図版33 出土遺物 土師器・土鍤  
図版34 出土遺物 製塩土器  
図版35 出土遺物 製塩土器  
図版36 出土遺物 蜷壺形土器  
図版37 出土遺物 蜷壺形土器  
図版38 出土遺物 須恵器  
図版39 出土遺物 蜷壺形土器・土鍤・須  
恵器  
図版40 出土遺物 木製品  
図版41 出土遺物 蜷壺形土器・土鍤・瓦  
図版42 II区・III区第3・4層出土遺物  
図版43 II区・III区第3・4層出土遺物  
図版44 花粉化石の顕微鏡写真  
図版45 珪藻化石の顕微鏡写真  
図版46 樹種鑑定顕微鏡写真  
図版47 樹種鑑定顕微鏡写真



## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

脇浜遺跡は、貝塚市脇浜一丁目から三丁目に所在し、T P + 10m前後の段丘上部と T P + 2 ~ 4 mの海岸の低位部にまたがる広範囲の遺跡である。その一部が、大阪府下では数少ない低地部にある遺跡として注目され、部分的表示ながら、早くから大阪府文化財分布図にも記載されている

周知の遺跡であった。しかし具体的な内容は全く不明で、散見される遺物から、中世頃の海浜の遺跡と考えられていた。

この地に都市計画道路貝塚中央線建設の計画が具体化した1975年、大阪文化財センターによって発掘調査が行われて遺跡の存在が再確認され、それまでの文化財分布地図に示されているよりも遺跡の範囲が広がることが判った。

これを受けて1981年から1982年にかけて、府道堺・阪南線（旧国道26号線）以南の調査が大阪府教育委員会によって実施され、古墳時代から近世にかけての据立柱建物址など多数の遺構が検出されている。この時点では、堺・阪南線以北に続く脇浜遺跡の発掘調査は将来の課題として残されていた。

かねてより泉佐野沖に計画されていた関西新空港建設が着工の最終局面に近づいた1985年、国道26号線以北の貝塚中央線工事着工が急務となり、残されていた脇浜遺跡の発掘調査について大阪府教育委員会文化財保護課と大阪府土木部交通政策課の間で協議が行われ、府教育委員会の指導により、本協会が発掘調査を実施することになった。

これによって、1985（昭和60）年6月1日、本協会と大阪府土木部岸和田土木事務所で調査委託契約を結び、1985年6月19日から現地調査に着手した。

(藤田)



第1図 脇浜遺跡調査前風景

## 第II章 地理的・歴史的環境

### 地理的環境

脇浜遺跡がある貝塚市脇浜は、大阪湾の南西海岸部のほぼ中央にある。遺跡は、深い浸蝕崖をもつ近木川右岸の中位段丘と目されている段丘上から段丘下の低位部に広がり、高さ2m以上ある防波堤を越えて、砂浜まで続いている。現在は、この沖合が埋められており、調査開始時には間近に見えていた海も調査終了時の1986年春には、数キロ沖合まで埋めたてが進み、潮の香はおろか段丘上からでも海を望むことはできなくなった。この地に砂浜があったことの証左は、人々の記憶と共に失われてしまう日も遠くないであろう。

泉南（泉州南部）と通称されているこの一帯は南に和泉山脈を負い、山脈南側の急傾斜面とは対称的に、ゆるやかな裾野が広がっている。一見なだらかなこの地形も細かく見ていくと、TP200mを越す急峻な山地部、50~80mのなだらかな丘陵部、10~20mの段丘部、2~5mの海浜の低地部からなり、それぞれが著しい落差をもって段階的に下降している。この地形の差は地質の違いと対応し、頬家花崗岩類や泉州酸性火碎岩類と砾岩・砂岩・泥岩およびその互層（和泉層群）からなる山地部、大阪層群を中心とした丘陵部、その後の堆積による中・低位段丘部に大別される。山地部に発する河川は深いV字形の谷をつくり、丘陵部を離れる付近から西に流れて特に右岸部に河岸段丘を発達させている。丘陵部と河川水面の著しい落差と年間雨量の少ない泉州地域の自然条件のためか、丘陵上の各所に高い堤をもつ灌漑用の溜池がつくられ周辺の耕作に供されている。

（黒田）

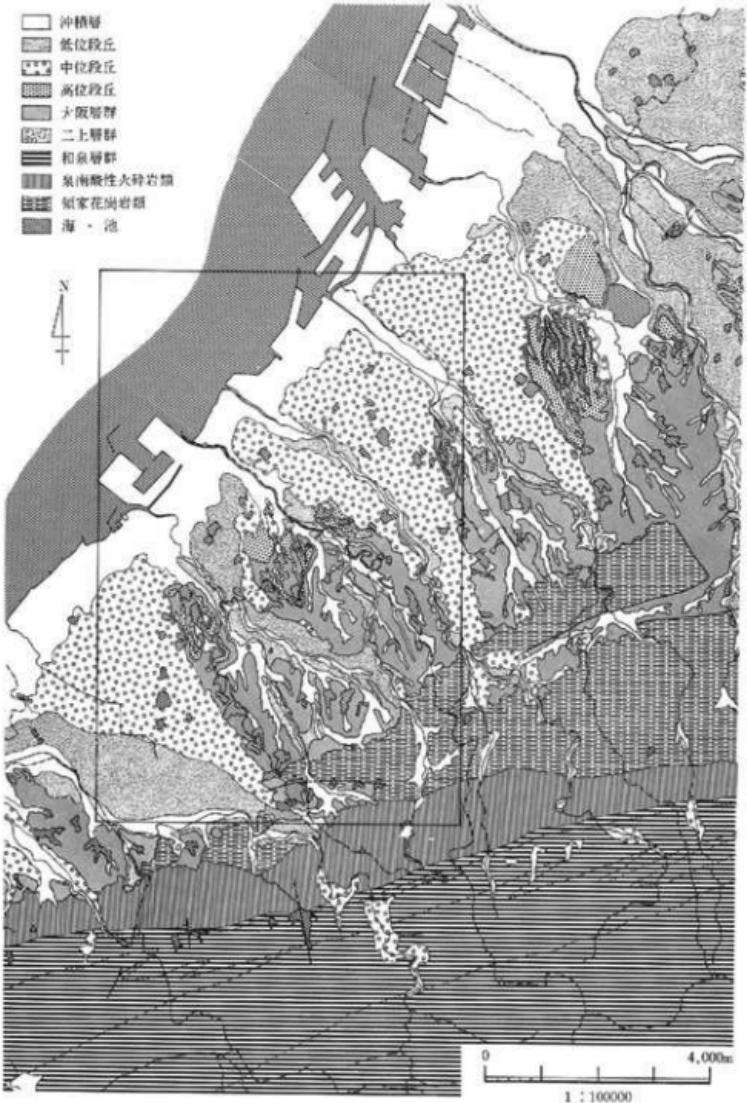
### 歴史的環境

貝塚市周辺の遺跡は、これまでの調査・研究が少ないとあって、詳細不明のものが多い。遺跡がないということではなく、未知のものが多いだけである。

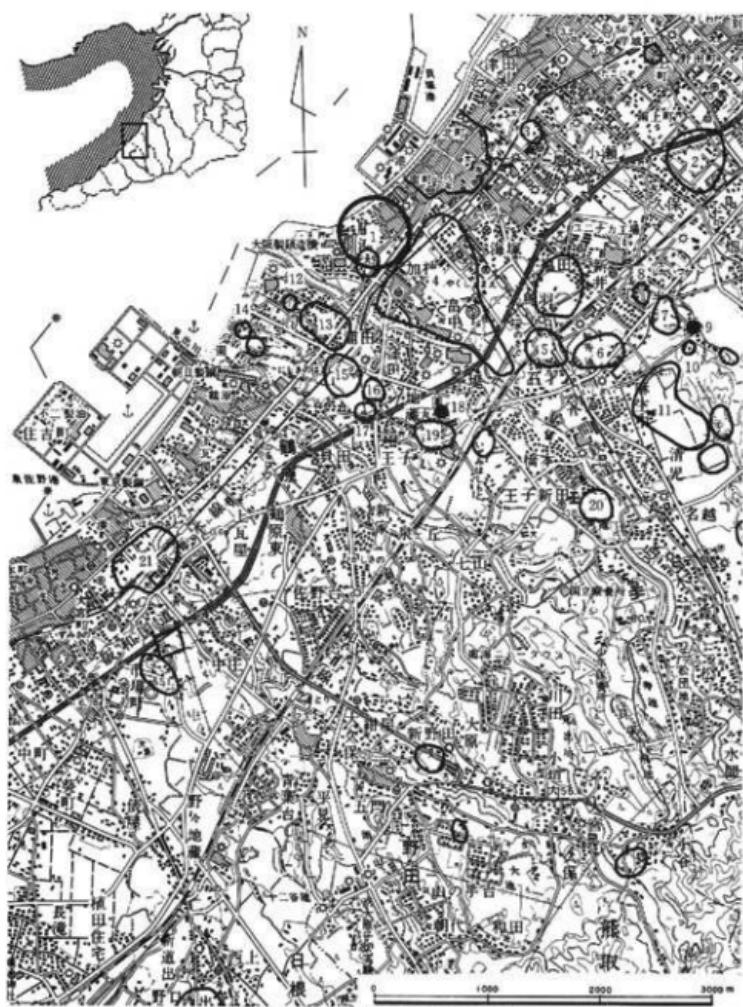
旧石器時代では、海岸寺山遺跡でナイフ形石器、新井ノ池遺跡で尖頭器が出土している。また、調査前の周辺観察から調査区南縁で、ナイフ形石器や剝片を採集している。

縄文時代になると脇浜遺跡の東に位置する畠中遺跡から、早期の押型文土器が出土している。泉州地域では唯一の資料である。周辺の代表的な遺跡としては海岸砂丘上の岸和田市春木八幡山遺跡（中期から晚期）、沖積段丘上の岸和田市箕土路遺跡（中期）がある。

弥生時代では前期の遺跡はほとんど分かっていない。中期に入ると、津田川と近木川の間に畠中、石才、清児、河池、海岸寺山、半田遺跡等が近木川と見出川の間に沢新田、沢、



第2図 貝塚市周辺地質図（註1書より一部改変）



第3図 貝塚市周辺遺跡分布図

1. 脇浜遺跡
2. 土生遺跡
3. 堀遺跡
4. 加治・神前・畠中遺跡
5. 石才遺跡
6. 新井ノ池遺跡
7. 平田遺跡
8. 乗鹿寺
9. 海岸寺山古墳
10. 海岸寺山遺跡
11. 梅兒遺跡
12. 沢共同墓地遺跡
13. 沢遺跡
14. 沢新田遺跡
15. 鶴池遺跡
16. 鹿田廬寺
17. 鹿田遺跡
18. 丸山古墳
19. 地藏堂遺跡
20. 河池遺跡
21. 游進跡

窪田遺跡等が存在する。続く後期の遺跡は、新井ノ池遺跡で土器片が採集されている程度で様相は不明である。古墳時代前期にかけての遺跡についても不明である。

古墳時代では前期末から中期の築造と考えられている全長72mの前方後円墳、丸山古墳がある。從来丸山古墳は単独墳と考えられていたが、最近の発掘調査で5世紀末葉の近接した2古墳の存在が確認され、両者の関係が注目される。集落遺跡では、畠中遺跡で6世紀後葉の堅穴式住居址などが検出されている。また、近木川河口近くの段丘縁辺部に立地する沢共同墓地遺跡では製塙土器が出土している。製塙土器を出土した近辺の代表的な遺跡としては、岸和田市土生遺跡、泉佐野市湊遺跡などがある。さらに府下の窯址としては南限となる海岸寺山窯址群があり、6世紀後半の遺物が出土している。また、窯と同時期の遺物を出した横穴式石室を持つ古墳が近くに存在したという。7世紀代の堀遺跡では、溝の中から多くの須恵質板瓦壺形土器が出土し注目される。

奈良時代の遺跡には、加治・神前・畠中遺跡がある。畠中遺跡では平安時代とされる掘立柱建物址も見つかっている。また、寺院跡としては奈良時代に遡る泰庵寺、平安時代の地藏堂廃寺をはじめ8つの寺の存在が考えられているが、その詳細はいずれも不明である。

中世以降も畠中遺跡、地藏堂廃寺遺跡、濱池遺跡等多くの遺跡が知られるようになる。

以上、周辺の遺跡についてその概要を述べたが、既知遺跡のほとんどは段丘上に位置し貝塚市域ではむろんのこと、泉州地域でも海岸平野部分での調査が、ほとんどおこなわれていないのが現状である。

文献からたどれる環境にも触れておきたい。

貝塚市脇浜は、近世に畠中・加治と分離するまで神前に属した。「神前」は『行基年譜』にみえる「神前船島」、中世の高野山領近木庄「神前里」にあたり、所在は不明確ながら<sup>(3)</sup>式内社もあったと伝えられる地である。<sup>(4)</sup>

「神前船島」の位置については諸説があるが、『行基年譜』天平13年記の鎌倉時代の追記に「近木郷内申候」とあり、一般に近木川河口がそれとされているようである。<sup>(5)</sup>

高野山領近木庄は近木川を挟んで神前・畠中・窪田など旧12ヶ村にわたり、律令行政区画である日根郡近義郷がそのまま庄園化されたものである。田積227町歩、畠積78町歩余に及ぶ広大な地域を占め、16世紀まで存続した。國衙領近義郷に施行されていた上番、中番、神前番、馬郡番の4ヶ番を立庄以後も地域区分として用い、脇浜遺跡の所在する神前里は神前番と馬郡番に属する。遠藤 嶽氏は近木庄4ヶ番の復元を試み(第4図)、神前里の東阡線を今回の調査地周辺に求めている。



第4図 神前里など近木庄復元図(註5b書による)

岸市史』第3巻(1958)に

「一、妙見宮御祭礼、往古者神前之神社と奉称大社ニ而御社領有之神前千軒市町有之候而御銘々御宮御座候得共、永禄天正年中兵乱之御焼失退転ニおよび候由申伝、氏人古人ととも聞伝へ残念ニ奉存候御事」

となり、神前神社が江戸時代、妙見宮として祭られていたことを知り得る。

4. 吉田東伍氏は旧日根郡と高麗郡の郡界とし(『大日本地名辞書』上方 1901)、井上光貞氏は岸和田市付近(『行基年譜、特に天平十三年記の研究』『律令国家と貴族社会』 1969)に、柴原永遠男氏は泉佐野市付近(『海路と舟運』『古代の地方史』 2 1977)に、井上 薫氏は貝塚市(『国史大辞典』第1巻 1979)に比定している。また、泉南郡岬町多奈川の亀ヶ崎に比定する説もある。
5. 以下の記述は、遠藤 肇 a 「和泉國近木庄における在地構造」(東北大学『文化』28巻3号 1964)  
b 「和泉國近木庄の馬上帳と条里制の性格」(豊田 武編『高野山領庄園の支配と構造』 1977)に拠る。

以上のような知見から、今回の調査では、長期にわたる遺跡の様相が想定されていた。

(黒田・田中・鶴宣田)

#### 註

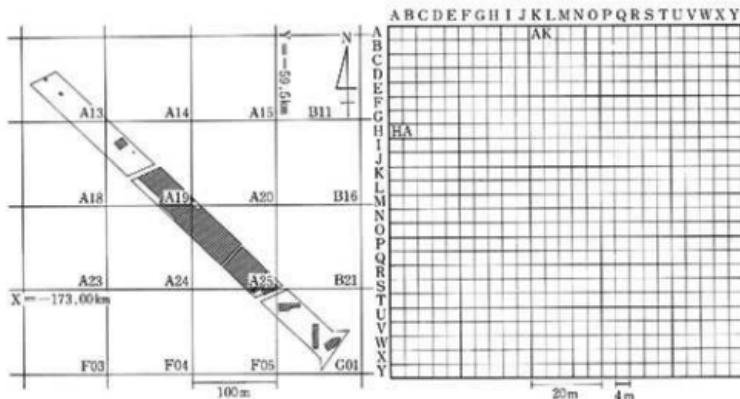
1. 千地万造「和泉地方の地質と構造」『岸和田市史』第1巻(1979)地質図の作成も上記文献に拠った。
2. 遺跡分布図の作成は、『大阪府文化財分布図』(1986)、石部正志・鈴木重治『岸和田市史』第1巻(1979)に掲げた他、市内の近年の調査成果は貝塚市教育委、西岡 嶽、池田 誠氏の御教示を得た。
3. 宽政11(1799)～嘉永3(1850)年の「御向社氏子座入帳」(『貝

## 第III章 調査の成果

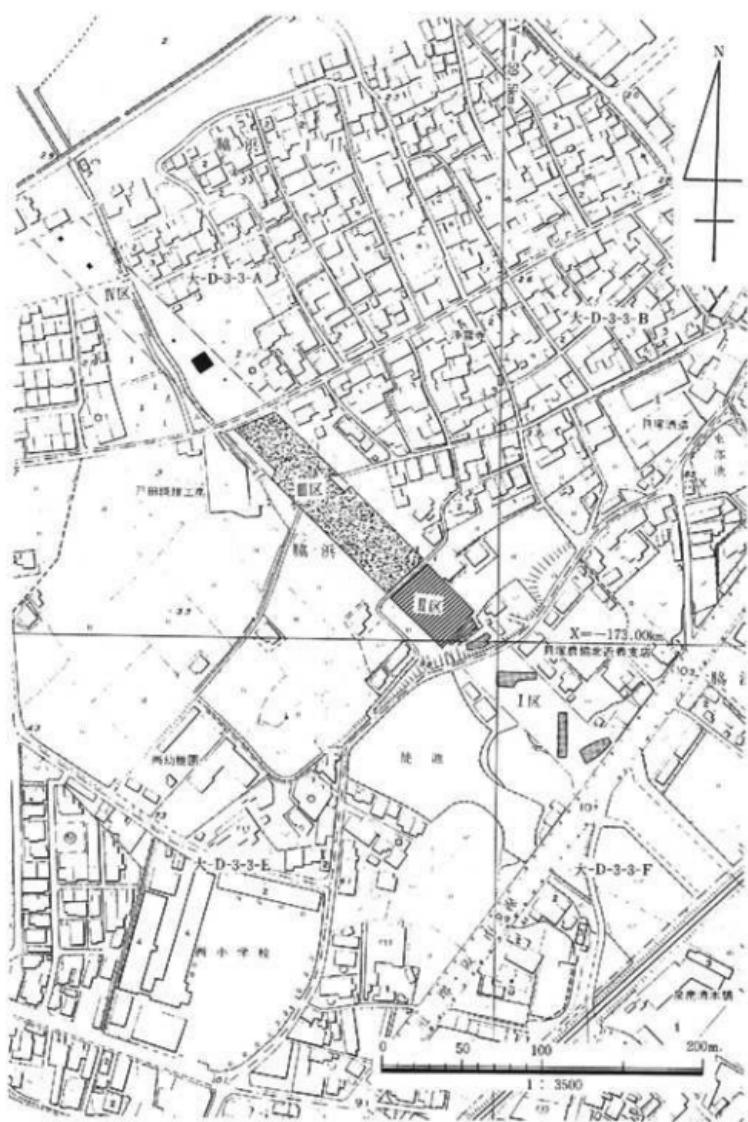
### 第1節 調査の方法と経過

はじめに、本文中で用いる地区名その他の記号について説明しておきたい。調査では、国土座標法による新平面直角座標第VI座標系をもとに $4 \times 4\text{ m}$ の最少区画を設定している。大阪府発行新版（昭和59年建設省国土地理院承認）の1/2500地形図に示された500m区画とその呼称を踏襲し、これを100m区画に割って、北西隅から東へ01～25の番号を与えた。さらにこれを縦横それぞれ25等分（4 m）に区切ってA～Yの記号をふり、これによって出来た4 m区画に対して、AA、ABというように表現している（第5図参照）。脇浜遺跡の今回調査区のうち、本書で主に報じる部分は大D-3-3 Aの中の19、20、24、25の100 m区画内に位置する。また、主に遺構説明の項で用いた72-OR等の表記は、遺構名（アラビア数字=72）と遺構の種類（アルファベット=OR）を示している。遺構の種類は本協会で定めた略号を用いており、本書に関係する略号の意味は別記の通りである。

本書では、この表現以外に、記述の都合上便宜的にI～IV区の区分けを用いている（第6図）。I区は段丘上、II区は段丘下約50mのところを横断する里道まで、III区はここから約120mのところを横断する市道まで、IV区は市道から北西部の端までを呼ぶ。



第5図 地区剖模式図



建物	O B	柵・塀	O F
池・沼	O L	土塁	O O
ピット	O P	河川	O R
井戸	O W	田・畑	O Z
		その他・不明	O X

調査は基本的に、現代耕土あるいは明らかに現生活面にかかる盛土については機械掘削で除去し、それから下層は人力で掘り下げた。駿浜遺跡の今回調査地は、立地の上から海岸段丘部（I区）と海岸低地部（II～IV区）とにわかれる。調査前の地目はいずれも、宅地、畠、水田である。

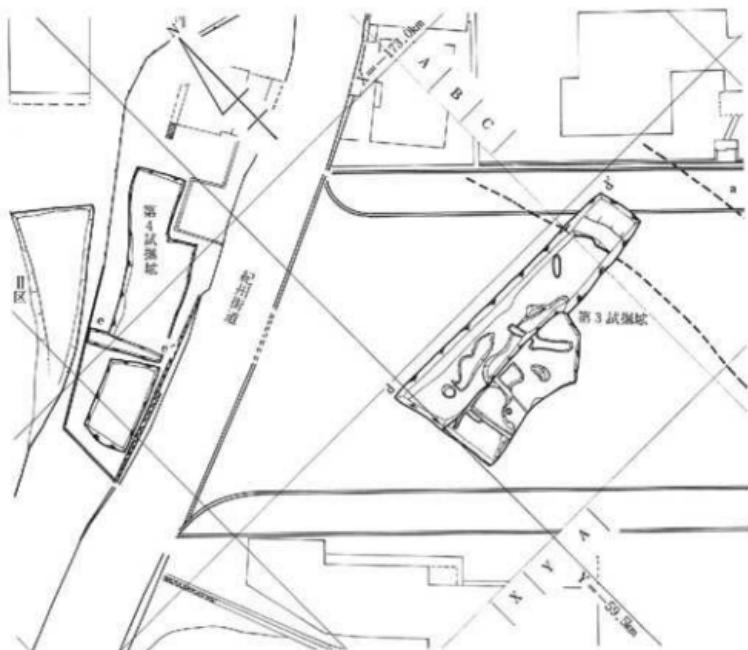
この地区的とくに低地部の遺跡の様相を知る手掛りは表採遺物以外ほとんどなく、また段丘上も、既往の調査結果から、近代の煉瓦工場の粘土採掘が予測されていたので、まず試掘場を設定して後、必要に応じて全面掘削に入ることにした。この結果、I区とIV区の一部については、擾乱が深部に及んでいて、遺構面が残っていない可能性が強く、またIV区では、出水のため、常態では掘削が不可能と判断して、一部矢板を打って深掘を行い、全面調査は見合わせた。II・III区については、遺構の存在が予測されたので、隨時全面掘削に切り替えた。したがって、今回の報告はII・III区の調査を中心としている。I・IV区は本章第2節に合わせ記述し、全体の層序を第3節、II・III区を第4・5節に記す。（藤田）

## 第2節 I区およびIV区

### I区（第7～9図）

I区は府道構・阪南線から段丘崖にかけての段丘上に位置する。今回、試掘場を府道・紀州街道間に3ヶ所、段丘崖の擁壁地に1ヶ所設定し、これら調査区を府道側から海側へ順次、第1～第4試掘場と呼称した。I区の調査予定地は周囲の田畠と比較して、1m程度高く、近年に盛土されたことが推測された。現地表高はTP+9.8～10.5mを測る。この段丘上の調査区は、貝塚中央線が計画されるまで酪農工場が営まれていたことから、工場建設の際の擾乱が予測された。また（財）大阪文化財センターや大阪府教育委員会の既調査の結果、周辺は多くの近代の煉瓦の工場の粘土採掘によって擾乱されており、今回の調査区も粘土採りの害を被っている可能性があった。

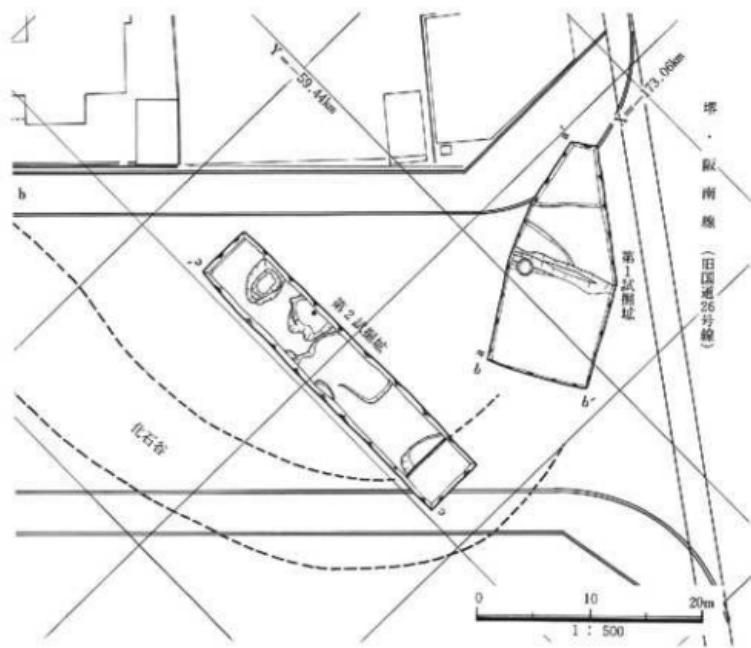
第1試掘場は府道際のI区東隅に設定した。周辺の既調査から、この試掘場の位置は粘土採りをまぬがれた可能性が大きいと考えたからである。試掘場は第7図のような六角形



第7図 I区平面図

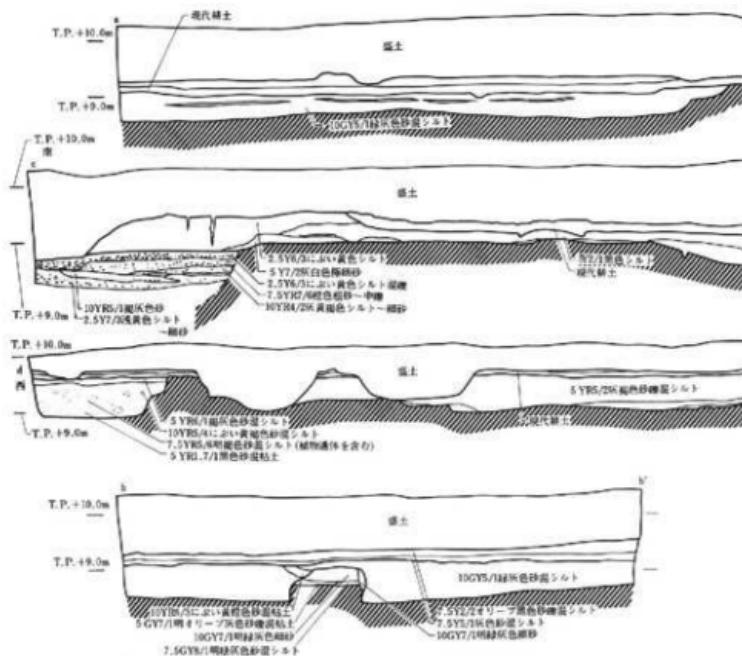
を呈し、短辺約10m、長辺約20m、幅2.5~9mである。試掘場中央部のみ地山は高く、現地表下10~40cmのTP+10.0mで現れるが、その両側の地山はTP+9.2m、+8.5mまで平坦に掘削され、枕木など近代の廃棄物を含む灰黄色~緑灰色砂混シルト層で被われている。地山の高い部分は、幅4~6mにわたって土橋状に掘り残された態である。この地山の高まりの西の落ち際で、直径1.2mの円形を呈する素掘り井戸を検出した。近世の陶器片が出土したことから近世の井戸と思われる。井戸底はTP+6.8mを測り、埋土は青灰色砂疊であるが、埋土上部は鉄分沈澱のため明赤褐色を呈し、上部南半分に1辺10~20cmの角礫がほうり込まれていた(第9図)。

第2試掘場は南北方向に、長さ約30m、幅約5mの範囲で設けた。現地表高はTP+10.2mを測るが、現代盛土厚が80~160cmで、その直下に厚さ20cmの現代耕土が現れる。その下層で黄褐色シルト~砂疊が、地山上面に厚さ15~70cmで堆積している。地山上面は



凹凸に富み、TP + 8.3~8.9m を測る。地山土は黄白色シルト~砂からなるから、地面上の凹凸の存在を即、粘土採りに帰することはできない。試掘場南端で、幅3.7m以上、深さ1m以上の化石谷を検出した。

第3試掘場は当初、東西方向に長さ約25m、幅約5mで設定したが、TP + 9.5mに分布する黒色砂疊粘土層の性格が問題になるに及んで、南側に長さ15m、幅5mにわたって拡張した。本来の黒色砂疊粘土層は、段丘上に広く分布する。弥生~古墳時代にかけて形成された層で、その上面には古墳~平安時代の遺構が数多く存在している。調査の結果、この黒色砂疊粘土層は、近現代の整地のために他から運ばれてきた客土であるという結論に達した。この試掘場の現地表高はTP + 9.7m~10.2m、現代盛土の層厚は10~50cmで、その下層に層厚10cmの現代耕土が一部存在する。撤去された酪農工場の基礎や井戸が各所にみられた。地山は部分的にはTP + 9.6mを測るが、TP + 9.0m前後まで掘削され、

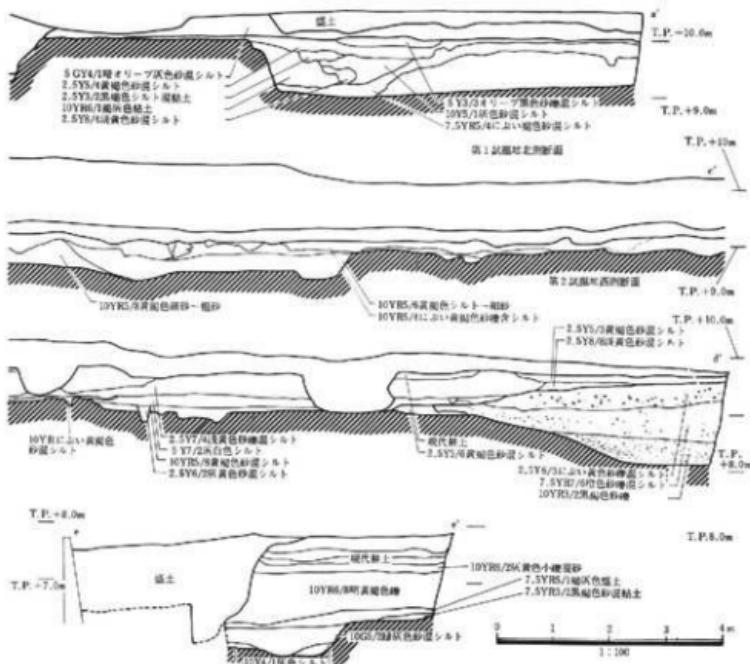


第8図 1区土層断面図

その直下に灰褐色砂礫混シルトが層厚60cmで堆積している。この試掘坑の東端で、第2試掘坑で検出した化石谷の連続と思われる落ち込みをみいだした。幅は5m以上、深さは1m以上で、橙色砂礫混シルト～黒褐色砂礫が水成の堆積をみせている。地山土は黄色砂礫混シルトである。

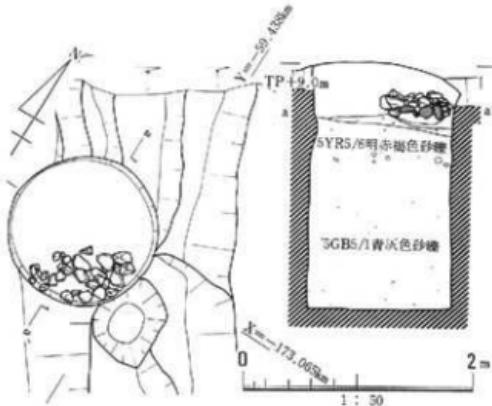
第4試掘坑は段丘崖の擁壁内に設定し、平面的調査と中央部の深掘りを並行した。現地表高はTP+7.8mである。しかし深掘りの結果、山側においてもTP+5.6~6.4m高の地山上面まで現代の廃棄物を含む埋土が堆積していることが確認されたので、調査を中止した。地山上面は比高60cmの段をもつ、二段のテラスをなしている。

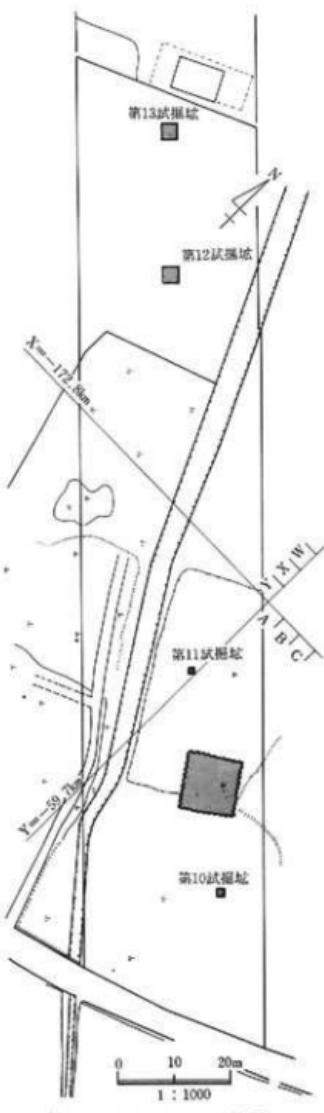
以上みてきたように、1区の段丘上・段丘崖部とともに、みるべき遺構や遺物包含層は存在しなかった。遺構や遺物包含層は近現代の人为的削平で消滅した可能性が高い。



第2・第3試掘地で検出された化石谷について  
は形成時期・埋没時期とともに不明である。

I区は試掘結果から、  
全面にわたって近現代の  
擾乱が及び、遺物や遺構の  
残存する可能性が極めて  
乏しいことから、全体  
の発掘調査を見送った。  
(黒田)





第10図 IV区トレーニング位置図

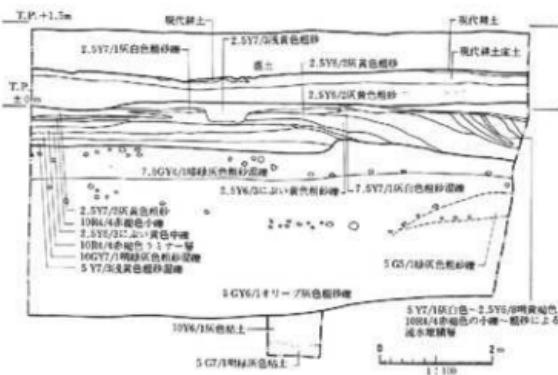
#### IV区(第10・11図)

IV区の現在の地目は畠地・墓地・駐車場で、調査区のはば中央を斜め方向に三昧川が横切っている。IV区山側の畠地は、III区の古墳時代の流路91-O-Rの河口部分に位置し、IV区海側の墓地と駐車場は、南から延びてきた砂堆上に位置する。

まず土層の堆積状態を把握するために、第10～第13試掘場を坪掘りすることにした。第10・11試掘場のある荒地の現地表高は約TP+1.5mである。第10試掘場は地表下1.7mまで掘削したが、地表下1.2mまで現代盛土層で、その下層は青灰色砂層であった。第11試掘場は地表下0.8mまで掘削したが、地表下0.7mまで現代盛土で、その下層は黄灰色砂の現代耕土層であった。第12・第13試掘場は駐車場に設定し、現地表高はTP+2m前後であった。第12・第13試掘場とともに地表下1.8mまで掘削したが、底は現代瓦礫層の中途であった。聞取調査によると、十数年前に大規模な砂採取が行われ、瓦礫はその後に盛土としていられたらしい。いずれの試掘場も山水のため、以下の調査は不可能であった。駐車場部分は砂採りによる掘削がひどく、遺構の存在が期待できないことから調査を見合わせ、山側の畠地部分は出水が激しいことから出水対策として、一部、鋼矢板を打込み、調査することになった。調査区は第10・第11試掘場の間の10m四方の範囲に設定した。調査では近世流路を検出したにとどまったが、深掘りすることによって、基盤となっている砂礫層の様子などを探った。土層の堆積は第11図のようである。TP-1.1～1.3mで基盤となっている砂

疊層上面が検出され、その上に近世流路埋土を含む約160cm厚の水成層がのっている。その上層は現代耕土層である。山側部分については掘削深度が大きいことから、年度を改めて調査することになった。

(黒田)



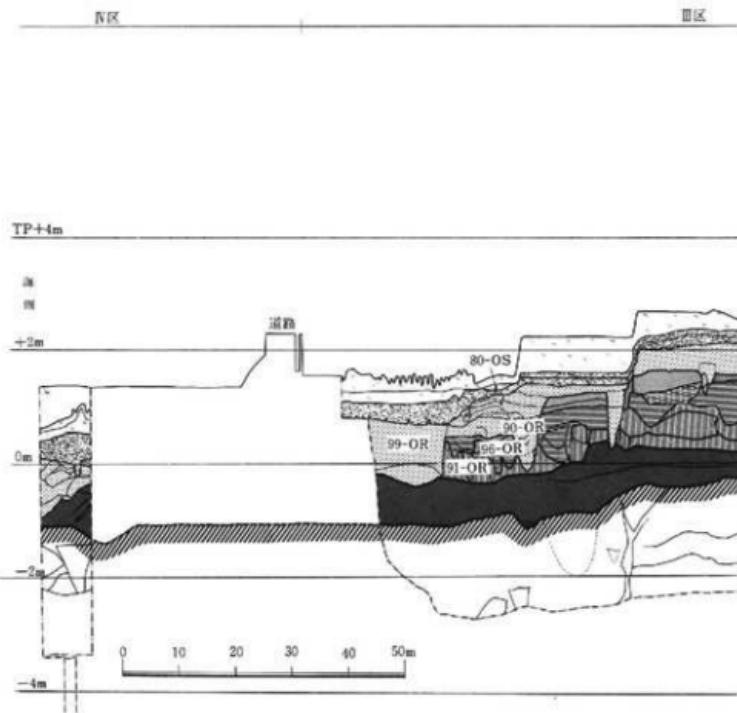
第11図 IV区土層断面図

### 第3節 層序

#### a) 概要 (第12~16図)

調査の主体となった海岸平地部のII・III・IV区、特にII・III区の層序について述べる。II・III区の現在の地目は水田で、山側から海側へ段々をなし高度を減じている。即ちII区において現代耕土上面は、TP + 5.5m、+4.6m、+4.2m、+3.9mを測り、III区ではTP + 3.4m、+2.9m、+2.7m、+2.2m、+1.5mを測る。このうち、TP + 4.6m以上の地は、基盤となっている層の立上がりの上に位置し、TP + 4.2m~2.9mの地は、基盤となっている層が波食された後、繩文時代晚期中葉までに形成された砂堆土に位置している。TP + 2.7mの地は、古墳時代前期には流路が存在し、それ以後、中世に至るまで沼状を呈し、現在においても雨が降るとすぐ水が浮いてくるような水はけの悪い地である。TP + 2.2~1.5mの地は、古墳時代には低い砂洲と自然河川の河口であり、近世においても流路が流れる低地部であった。今回の調査で基盤となっている疊層までの沖積層を、上位より第0層から第9層に分層できた。以下、下位より概略を示す。

第9層：砂疊からなる層で、層厚は100~270cmを測る。TP + 1.0m前後で色調が変わり、上部が黄褐色~灰白色、下部が緑灰色を呈し、前者が陸成層、後者が海成層(沿岸層)と思われる。層厚10cm~20cmの植物遺体層が1~2層、下層部に存する。この層の上面で繩文時代晚期中葉の生活面が検出されたので、繩文海進以降、繩文晚期中葉までに形

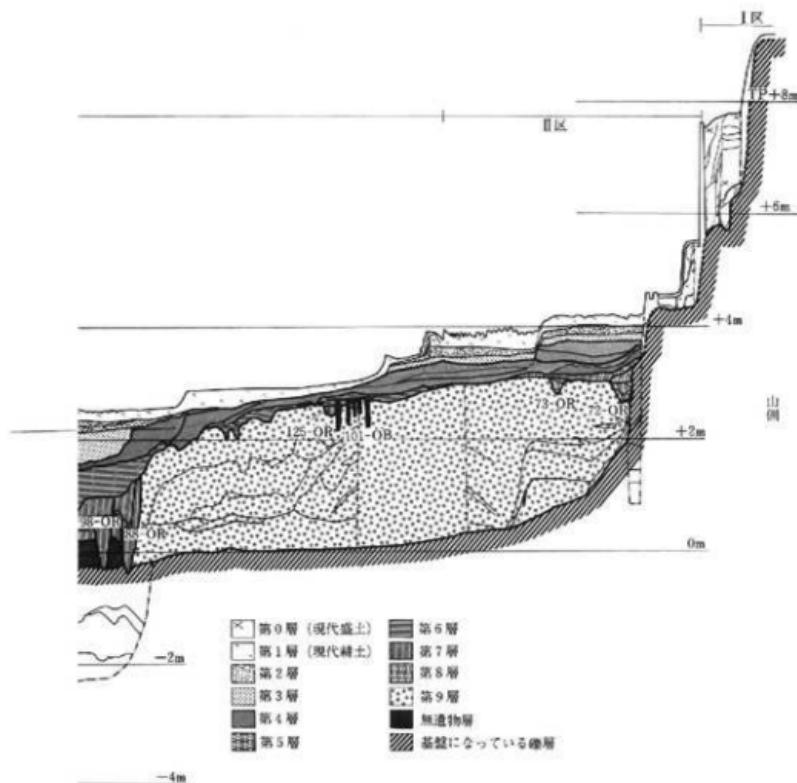


第12図 層序概念図

成された砂堆と思われる。なお、付論に豊田兼典氏の考察を掲げたので、参照されたい。

第8層：黒色ないし灰黄褐色砂混粘土層で、層厚は10~60cmである。砂堆上に存在する自然流路72-OR・73-OR(II区)、125-OR(III区)内やその周辺の凹地に分布する。この層の下面で縄文時代晩期中葉の土器が出土し(II区)、125-ORの埋土中より弥生時代前期の石庵丁が出土している。また、II区で、この層の上面においてカニ穴が検出されている。

第7層：灰色粗砂混礫や黒色砂混粘土などの水成層で構成される地層で、層厚は20~160



cmを測る。特にIII区の砂堆と砂洲の間の自然流路88-O R・98-O R内の堆積が顕著で、腐植層をなしている。92-O R内では一部、黄褐色細砂となる。古墳時代前期の遺物を多く包含する。

第6層：黒褐色シルトないしは粘土層で、層厚は10~80cmである。砂堆上の凹地および砂堆・砂洲間の凹地、それに自然河川91-O R内とその河口部に分布する。古墳時代後期の遺物を包含し、砂堆上でこの層の上面もしくは中途で、掘立柱建物101-O B、塚118-O F・121-O Fなどが検出された。

第5層：黒褐色砂礫からなる層厚10~30cmの地層で、砂堆・砂洲間に形成された湿潤地帯の凹地にのみ分布する。平安時代前期の遺物を包含する。

第4層：黄灰色砂混ないしはオリーブ褐色砂混粘土で、層厚10~60cmを測る。II区・III区の中世以前に陸化していた地域に分布する。II区の最大層厚部では3つに細分層できるが、上位層から下位層まで、包含する遺物に変化はなく、6~15世紀の遺物を包含する。III区山側の本層上面で、鞆溝(84-OZ)が検出されている。また、II区の最大層厚部で細分できた最下層を、第4c層と呼称する。この層はIII区の砂堆上にも連続してみられ、II区・III区ともにこの層上面から掘り込まれたと思われるビットが検出され、第4c層より上層はいずれも稻のプランツ・オバールが検出されたにもかかわらず、III区で採取された当該土壤からは、それが検出されなかったという特徴をみせる。

第3層：黄色砂礫混シルト層で、層厚10~60cmを測る。最大層厚部は90-O R内の150cmで、III区海側の河口部では、地層は灰色砂礫になる。本層上面は近代の区画整理事業を被ったとみて、顕著に平坦化されている。近世の染付を含む。

第2層：黄褐色シルト含砂ないし灰白色砂礫によって構成され、層厚10~40cmを測る地層である。III区海側で本層下面で、南北方向の歓を検出した。近代の遺物を含む。

第1層：現代水田耕土で、層厚は10cmを測る。

第0層：現代盛土である。

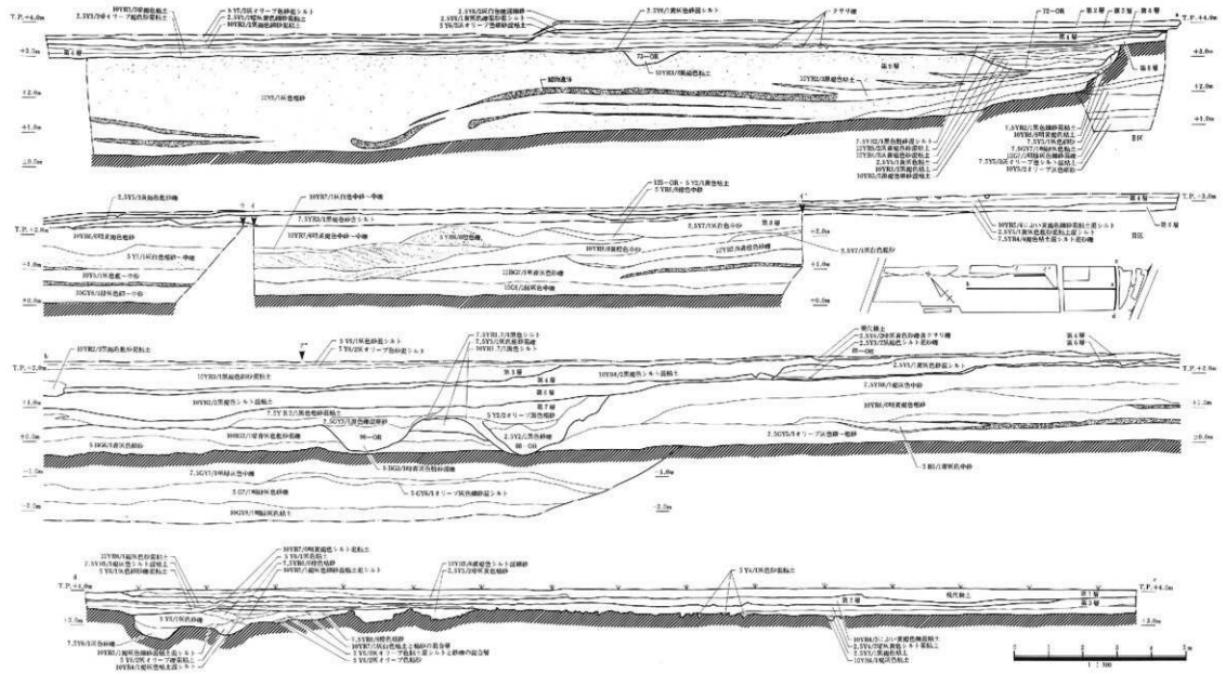
「基盤となっている疊層」について一言すると、IV区のTP-0.8m前後で検出される暗緑灰色砂礫層のN値が30であり、その下層のオリーブ灰色砂礫層の下部でN値は35を測る<sup>(1)</sup>。その下層は粘土層となっているが、以上の調査結果をふまえて、「基盤となっている疊層」と呼称した。

#### 土層断面図について

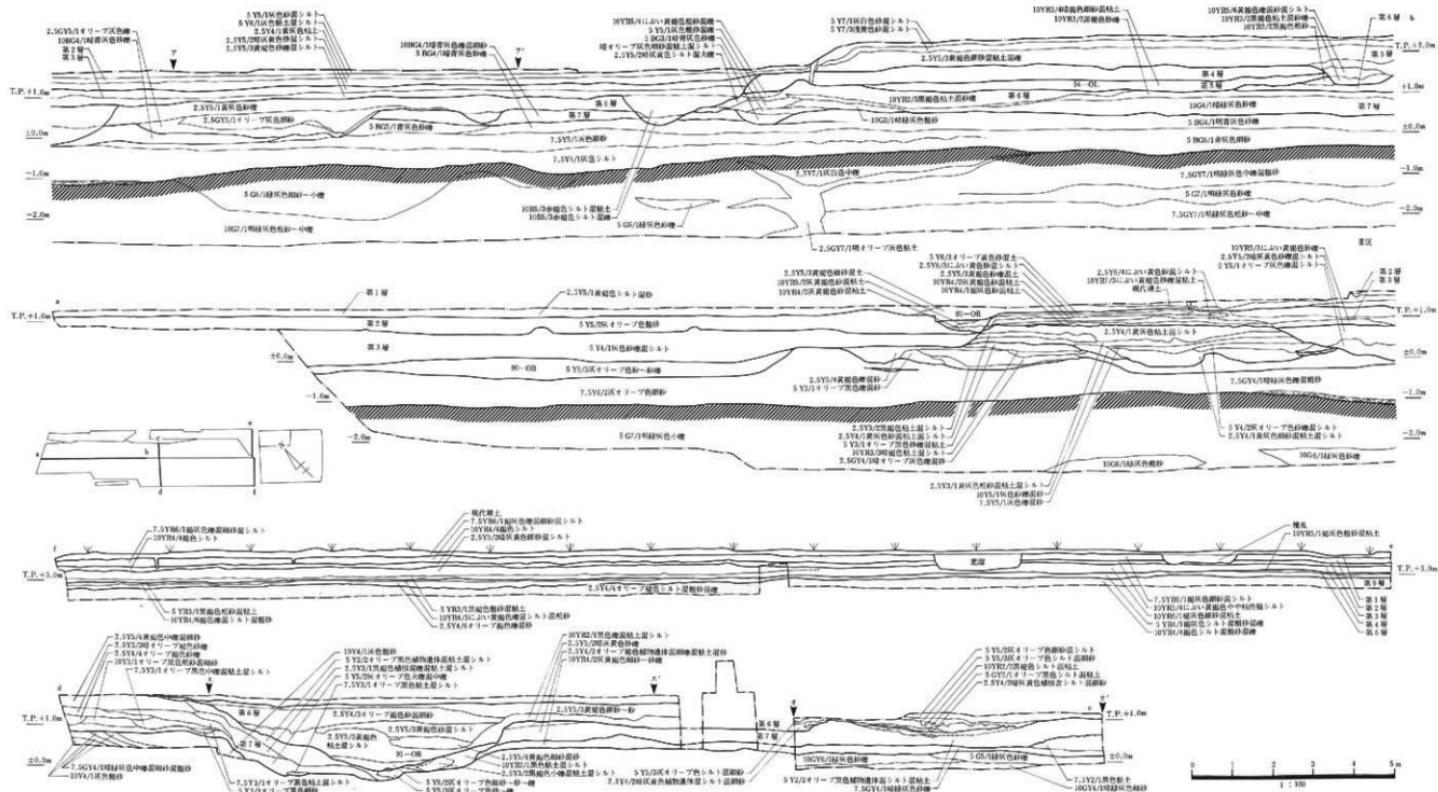
第13図~16図はII区・III区の山側-海側方向の3本の土層断面とそれに直交する3本の短い土層断面を集めたものであり、中央駐は地質観察のために深掘りし、土層断面自体も幅が広いので、第13・第14図に分けて載せ、その下に、直交する土層断面を掲げた。第15図は南東-北東壁の土層断面で、第16図は南西-北西壁の土層断面である。南東-北東壁で、砂洲の形成過程が観察でき、南西-北西壁で、古墳時代河川91-O Rの本流が、また94-O Rに切られながらも海側につづいていく砂堆の様子も看取できる。

(黒田)

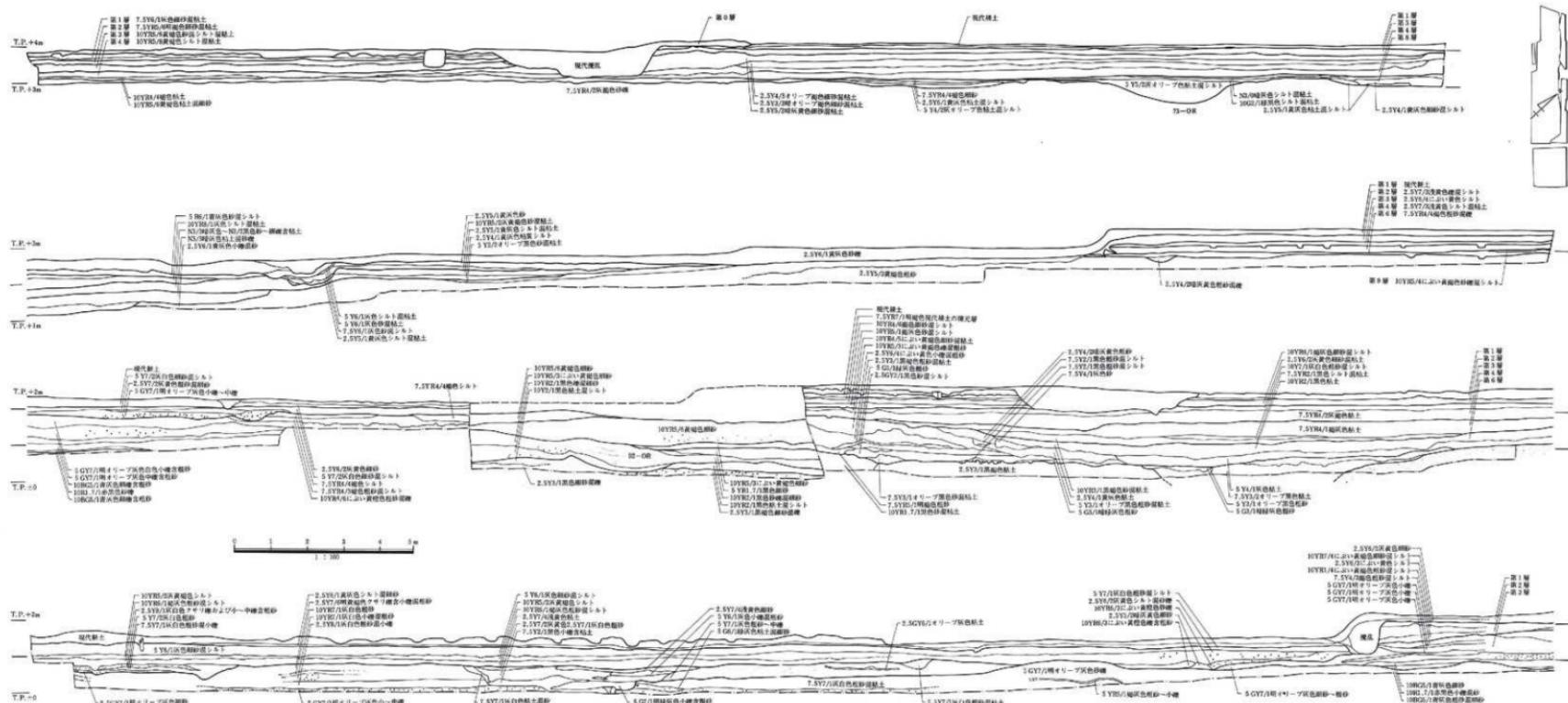
注1 「船浜遺跡発掘調査に伴う機械掘削等請負工事 土質柱状図」(1986年1月)による。



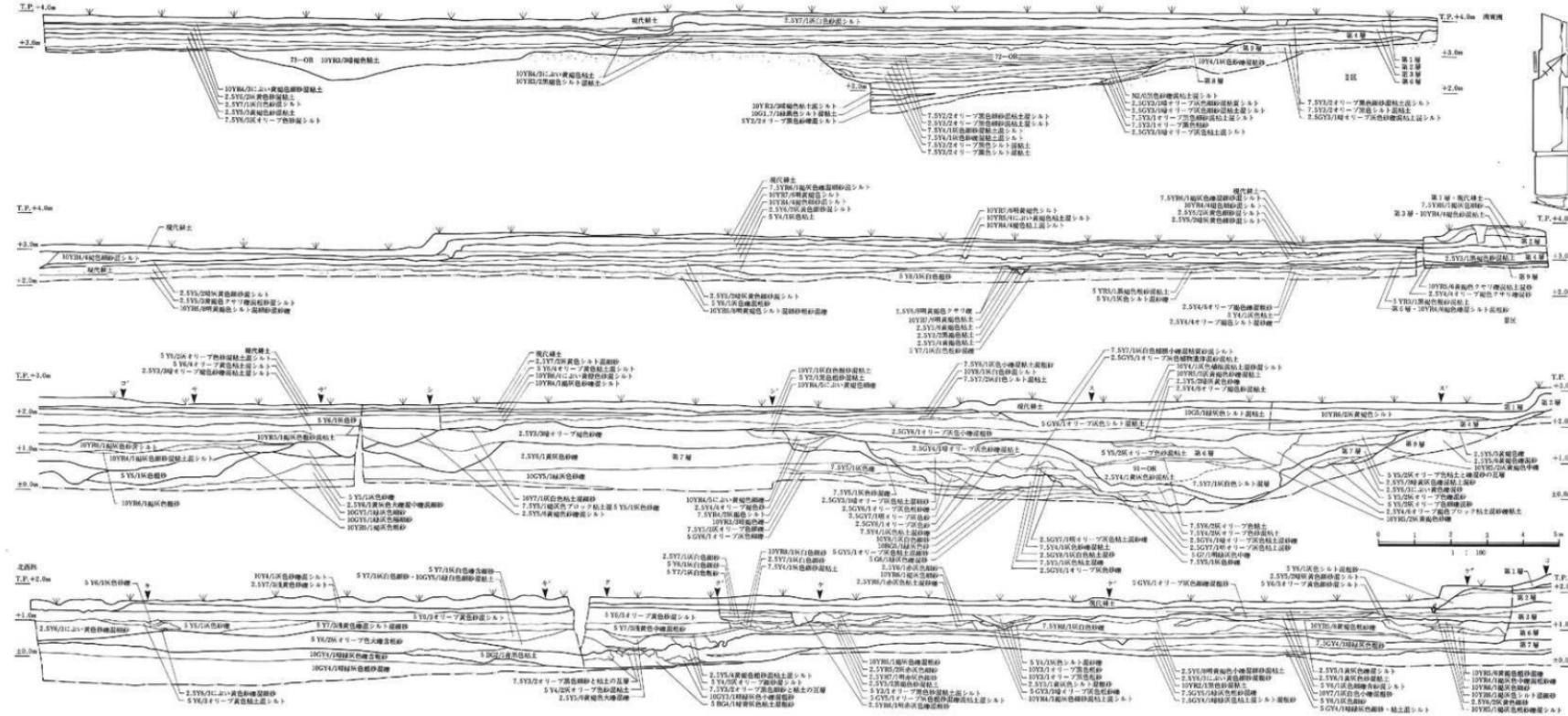
第13図 中央壁土層断面図およびII区直交壁土層断面図



第14図 中央畦土層断面図およびⅢ区直交畦土層断面図



第15図 北東壁土壌断面図

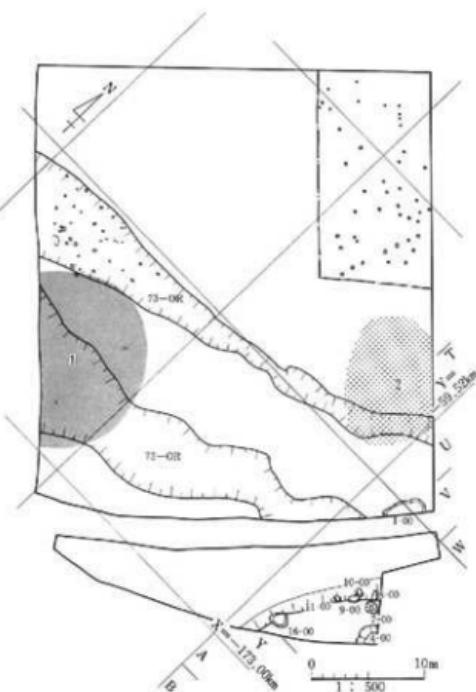


第16図 南東壁土層断面図

#### 第4節 II 区

##### a) 概要 (第17図)

II区はI区との境になる段丘下から海側、調査区を横断する里道までの約50mの範囲をさす。段丘直下には近代の地上げによる擁壁工事部を除いて、TP + 5.5mから3.9mまで計4段の耕作地がある。1、2段目（段丘下より、約10mの部分）は、段丘上と同様、粘土探掘が行われていて、その他の顕著な遺構は認められなかった。3、4段目では、縄文晩期の自然流路と遺物、古墳時代から中世にわたるビット群、土塙の他、カニ穴や足跡と思われる痕跡が多数認められた。しかし、性格の明らかな遺構はほとんどなく、包含層



第17図 II区全体遺構配置図

(第3・4層) 出土の遺物も3cm前後の小片になっているもの多かった。

東北隅の一部分は、宅地移転等の関係で、年度を改め、1986年度夏に実施した。この部分には多数のビットが検出されたので、本節に含めて報じることにする。

(藤田)

##### b) 縄文時代

縄文期だけの単純包含層は認められず、主にII区南半の均質な砂層（第9層）をベースにして若干の縄文時代晩期の土器が出土している。明確な遺構はみられず、縄文時代晩期以降に埋没したと思われる自然流路2条と遺物が少量ながらまとまって検出されているだけである。ただ、主に2条の流路に挟まれた地点を中心に砂の表面に、径1~3mの不鮮明な輪郭をもつ、にぶい褐色系の変色部分が数ヶ所認められた（第18図アミ目部分）。そ